

病害虫発生予報 第4号(7月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病 紋枯病 縞葉枯病 ニカメイガ ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ セジロウンカ トビイロウンカ コブノメイガ	並並並 並並並 やや少 やや少 並並	野菜全般	ミナキイロアサミウマ ミカンキイロアサミウマ シロイチモンジヨトウ	並並 やや少
			カンキツ	黒点病 かいよう病 ミカンハダニ ヤノネカイガラムシ チャノキイロアサミウマ ゴマダラカミキリ	やや少 やや少 やや多 並並 やや少 並
ウリ類	疫病 べと病 うどんこ病 つる枯病 炭疽病	並並 やや少 並並 やや少	カキ	炭疽病 うどんこ病 円星落葉病、角斑落葉病 フジコナカイガラムシ	並並 やや少 やや少 やや少
ナス	疫病	並	モモ	せん孔細菌病	やや多
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類	並並	果樹全般	カメムシ類	多

気象予報

1か月予報（予報期間 6月21日～7月20日 大阪管区气象台）

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、平年並または低い確率ともに40%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温 (平年値) (℃)	月降水量 (平年値) (mm)
7月	和歌山 27.0	和歌山 145
	潮岬 25.5	潮岬 291

I. 水 稲

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%(平年0.1%)であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。
- ② 常発地及びコシヒカリ、キヌヒカリ等の罹病性品種では発病しやすいので初発時期に注意し、発生が見られたら直ちに薬剤防除する。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%(平年0%)であった。
- ② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の発病株率は0%(平年0%)であった。
- ② ヒメトビウンカ(越冬世代)の縞葉枯ウイルス保毒虫率は、和歌山市12.2%(過去7年の平均15.8%)、かつらぎ町12.0%(同14.9%)であった。
- ③ ヒメトビウンカの7月の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカの防除を行う。

4. ニカメイガ(県北部)

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① フェロモントラップ(紀の川市)の6月1～20日の誘殺数は0頭(平年0.2頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 7月上旬における被害茎率が6.2%以下であれば、第1世代に対する防除の必要はない。

5. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部(田辺市以南)の早期栽培における6月中旬の25株あたり発生密度は0頭(平年0.2頭)であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市2頭(平年2.7頭)、上富田町0頭(平年0.1頭)、那智勝浦町0頭(平年0.4頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 箱施薬剤を処理した6月田植えのほ場では、7月の防除は特に必要としない。

6. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり発生密度は0頭（平成0.9頭）であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成9.9頭）、上富田町0頭（平成28.2頭）、那智勝浦町8頭（平成12.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

7. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 やや遅 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり発生密度は0頭（平成10.1頭）であった。
- ② 4月1日～6月20日まで予察灯への飛来は認めていない（初飛来平成：紀の川市6月9日、上富田町6月12日、那智勝浦町6月7日）。
- ③ 予察灯による6月1～20日の誘殺数はいずれも0頭（平成：紀の川市30.6頭、上富田町37.1頭、那智勝浦町13.5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

8. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり発生密度は0頭（平成0頭）であった。
- ② 4月1日～6月20日まで予察灯への飛来は認めていない（初飛来平成：紀の川市7月15日、上富田町7月5日、那智勝浦町6月30日）。
- ③ 予察灯による6月1～20日の誘殺数はいずれも0頭（平成：紀の川市0.3頭、上富田町0.2頭、那智勝浦町0.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカに準ずる。

9. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月中旬の25株あたり被害葉数は0葉であった（平成0葉）。
- ② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による6月1～20日の誘殺数は0頭（平成0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 幼穂形成期前後の被害は収量に影響するので、今後の予察情報に注意する。

II. 野 菜

<ウリ類>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は、県北部0%（平成0%）、県中部0%（過去6年の平均0%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 施設栽培キュウリにおける6月中旬の発生ほ場率は県北部50%（平成47%）であった。

② 露地栽培キュウリにおける6月中旬の発生ほ場率は県北部75%（平成74%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では換気を良くし、湿度低下を図る。

② 露地栽培では排水を良くし、薬剤を予防散布する。

3. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 施設栽培キュウリにおける6月中旬の発生ほ場率は県北部0%（平成31%）であった。

② 露地栽培キュウリにおける6月中旬の発生ほ場率は県北部0%（平成41%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、他系統の薬剤とのローテーション散布を行う。

4. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は、県北部0%（平成2%）、県中部0%（過去9年の平均9%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 降雨にともない株元から茎葉に病勢が進展するので、梅雨期の防除に重点を置く。

5. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は、県北部0%（過去3年の平均19%）、県中部0%（同47%、平成19～22年：散見される程度）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病した茎葉や果実は、ほ場外に持ち出す。

- ② 雨滴等により病勢が進展するので、梅雨期の防除に重点を置く。
- ③ 降雨日が連続すると多発する可能性があるので、長雨が予想される場合は予防散布を実施する。

<ナス>

1. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は0%（過去4年の平均0%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨後は早急に防除する。
 - ② ほ場の排水を良くし、多湿にならないようにする。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の寄生葉率は、モモアカアブラムシ0.9%（平成7.1%）、ワタアブラムシ0%（平成6.2%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬のワタアブラムシの1葉あたり寄生成虫数は0.1頭（平成0.3頭）であった。
 - ③ 黄色水盤（紀の川市）への6月1～20日の誘殺数は119頭（平成112頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① モモアカアブラムシ、ワタアブラムシは、薬剤感受性の低下がみられるので、同一薬剤の連用は避ける。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培ナスにおける6月中旬のハダニ類発生ほ場率は0%（平成：カンザワハダニ23%、ナミハダニ6%）であった。
 - ② 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬のハダニ類発生ほ場率は、カンザワハダニ36%（平成44%）、ナミハダニ0%（平成9%）であった。
 - ③ 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬のハダニ類発生ほ場率は、カンザワハダニ57%（平成34%）、ナミハダニ29%（平成27%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性対策として、同一薬剤の連用を避ける。

3. ミナミキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は11%（平成38%）、寄生葉率は2.7%（平成14.8%）であった。
 - ② 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は27%（平成24%）、寄生葉率は8.1%（平成4.0%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
 - ② 施設栽培では、栽培終了後に7～10日間施設を密閉して死滅させ、後作

の発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は、11%（平成9%）、寄生葉率は1.1%（平成2.3%）であった。
- ② 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は、27%（平成21%）、寄生葉率4.1%（平成4.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマの項に準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬の被害果率は0%（平成3.5%）であった。
- ② フェロモントラップによる6月1～20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平成6.7頭）、御坊市50頭（平成62.9頭）、印南町8頭（平成89.5頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
- ② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。
- ③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（有田川町奥）における6月中旬の発病果率は、無防除区7.5%（平成28.1%）、防除区0.5%（平成1.3%）であった。
- ② 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発病果率は0.3%（平成3.6%）、発生園率は3%（平成26%）であった。
- ③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① マンゼブ・マンネブ剤の場合、前回の薬剤散布からの累積降水量が250mm程度となった時点で散布する。
- ② 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。
- ③ 過乾燥等で樹勢が衰弱すると枯枝が増えるおそれがあるので留意する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 果実発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除区、有田川町奥）における6月中旬の春葉の発病葉率は0.7%（平成18.2%）であった。

② 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の春葉の発病葉率は0.2%（平年1.4%）、発生園率は17%（平年21%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生園では無機銅剤を散布する（薬害軽減のための措置を講じる）。強風雨に遭う前の予防散布が重要である。

② 罹病葉は果実への伝染源になるので剪除する。

③ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月中旬の発生園率は48%（平年36%）、100葉あたり雌成虫数は108頭（平年69頭）、寄生葉率は19.6%（平年17.7%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 高度の薬剤抵抗性系統が出現しやすいので、対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は薬害が発生しやすく、7月中旬以降の散布は果実品質を低下させるおそれがあるので、散布は7月上旬までとする。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

発生時期 第2世代1令幼虫初発日 7月6半旬

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除区、有田川町奥）における第1世代1令幼虫の初発は5月22日（平年5月17日）であった。

② 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における前年10月の発生園率は6%（平年7%）、寄生果率は0.3%（平年0.4%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 6月下旬に防除できなかつた園では、7月上旬のうちに97%・98%マシン油乳剤やスプラサイド乳剤40を散布する。

② 未成熟成虫がみられる場合はスプラサイド乳剤40を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（日高郡由良町）における黄色粘着トラップによる6月16～20日の誘殺数は39頭（平年240頭）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発生消長調査の結果を参考に適期防除に努める。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場、各地域とも成虫の初発は平年よりやや遅かったが、6月中旬の発生量は平年並であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生園では成虫の捕殺に努めるとともに、薬剤を散布する。
- ② 発生の多い園では7月中旬以降に、薬剤を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の発病新梢率は0%（過去8年の平均0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。
- ② 密植園や風通しの悪い場所は発病しやすくなるので、園内の通風・採光を良くし、薬剤をかかりやすくする。
- ③ 薬剤は発育枝にも十分散布する。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の発病葉率は「富有」1.2%（平年2.9%）、「平核無」・「刀根早生」0.1%（平年0.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に散布する。
- ② 盛夏期には発病が一時休止するが、好適な気象条件や園地条件によっては発病を繰り返すので、二次伝染の防止に努める。

3. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における前年10月の「富有」の円星落葉病の発病葉率は0.5%（平年4.5%）、角斑落葉病の発病葉率は7.1%（平年23.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹勢の低下が発病を助長するので、肥培管理に努める。
- ② 円星落葉病の子のう胞子飛散は、7月中～下旬までの降雨後に多くみられるので、この時期に薬剤を定期的に予防散布する。

4. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における6月中旬の寄生果率は「富有」2.1%（平年8.0%）、「平核無」・「刀根早生」0.4%（平年1.0%）であった。
- ② 県北部における6月中旬の発生園率は「富有」41.2%（平年56.5%）、「平核無」・「刀根早生」11.8%（平年15.7%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 本年のフジコナカイガラムシの発育の早晩は平年並と予想されるので、次回の防除適期は8月上中旬頃になると予想される。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 6月中旬の発生園率は90%（平成65%）、発病葉率は4.5%（平成4.5%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防風ネット、防風樹を設置するなどの防風対策を励行する。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県内47地点におけるチャバネアオカメムシの越冬成虫数は、落葉50リットル当たり2.1頭（前年0.1頭、平成0.3頭）であった。越冬成虫の捕獲地点率は51.1%（前年6.3%、平成16.0%）であった。
 - ② みなべ町東本庄の予察灯における5月1日～6月20日の越冬成虫誘殺数は、チャバネアオカメムシ3,129頭（過去4年の平均606頭）、ツヤアオカメムシ7,623頭（同2,108頭）であった。
 - ③ 紀の川市粉河の予察灯における5月1日～6月20日の越冬成虫誘殺数は、チャバネアオカメムシ729頭（平成152頭）、ツヤアオカメムシ709頭（平成171頭）であった。
 - ④ 6月中旬以降、越冬成虫誘殺数は減少しているが、ヒノキ花粉飛散数比（本年/前年）は0.2であり、カメムシの発生量に対して餌となる球果の量が少ないと考えられるため、果樹園への飛来は多いと予想される。
- (3) 防除上注意すべき諸点
 - ① 園内への多飛来を確認したら早急に薬剤散布を行う。
 - ② 農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や各地域のJA等の調査情報を参考にし、対応する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujoyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujoyouhou.html)

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>